

司式 ローレンス・スパーリンク宣教師
奏楽 堀口愛子姉妹

前 奏

開 会 招 詞：歴代誌上16章8-9節

* 賛 美 歌 2：1 主のみいつとみさかえとを

主のみいつとみさかえとを こえのかぎりたたえて、

またき愛とひくきころ 御座にそなえひれふす。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言：歴代誌上16章10-11節

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 48：1 主よ、おわりまで

主よ、おわりまで仕えまつらん、みそばはなれずおらせたまえ。

世のたたかいははげしくとも、御旗のもとにおらせたまえ。アーメン

公 同 の 祈 禱 祈禱書5 使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。われは、その独り子、われらの主イエス・キリスト

を信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 広島忠海聖恵会 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 歴代誌上15章1-3、11-15、25-28節 (旧約聖書648頁)

説教・祈祷 「信仰生活を慎重に」 L.スパーリンク宣教師

- * 賛美歌 83 : 1 友よふるい立て おおしくあゆめよ
友よふるい立て おおしくあゆめよ 主はともにいます いざすすめ。
神の国の 神の子らよ すべての民をキリストの弟子とせよ、
父・御子・御霊のみ神に導け 友よ立ち上られ いざすすめ。

* 主の祈り 祈祷書1

天にましますわれらの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

- * 頌 栄 91 : 2 つのぶえ、ふきて
つのぶえ、ふきて、たてごと、かなで、主をさんびせよ。たいこにあわせ、
神をさんびせよ。おどりまいつつ、ふえとげんもて 神をさんびせよ。

- * 祝 禱
後 奏 (黙禱)

報 告 古澤純一長老 (司会・受付 次週：門脇猷一長老)

* 日 受付 1階：森永美保執事 2階：那珂信之執事 / 動画：大日南信也執事 録音：雨宮信長老
週 受付 1階：若月学執事 2階：加藤良明執事 / 動画：門脇光生兄弟 録音：森永翔馬兄弟

説教題：信仰生活を慎重に

参照：ハイデルベルク信仰問答問 Q. & A. 2、32、86、99

説教者：ローレンス・スパーリンク（キリスト改革派日本伝道会宣教師）

聖書箇所：歴代誌上15章1-3、11-15、25-28節（旧約聖書648頁）

ダビデは、ダビデの町に宮殿を造り、神の箱のために場所を整え、天幕を張った。ダビデは言った。「神の箱を担ぐのは、レビ人でなければならない。彼らこそ、主の箱を担ぎ、永遠に主に仕えるために主によって選ばれた者である。」ダビデはイスラエルのすべての人々をエルサレムに召集し、主の箱を運び上げて、そのために整えた場所に納めようとした。... ダビデは祭司ツアドクとアビアタル、レビ人のウリエル、アサヤ、ヨエル、シェマヤ、エリエル、アミナダブを呼んで、言った。「レビ族の家系の長であるあなたたちは、兄弟たちと共に自らを聖別し、イスラエルの神、主の箱を、わたしが整えた場所に運び上げよ。最初のときにはあなたたちがいなかったの、わたしたちの神、主はわたしたちを打ち砕かれた。わたしたちが法に従って主を求めなかったからである。」

祭司とレビ人は、イスラエルの神、主の箱を運び上げるため自らを聖別した。主の言葉に従ってモーセが命じたように、レビ人たちが竿を肩に当てて神の箱を担いだ。... ダビデは、イスラエルの長老と千人隊の長たちと共に行き、喜び祝って主の契約の箱をオベド・エドムの家から運び上げようとした。主の契約の箱を担ぐレビ人を神が助けてくださったので、彼らは雄牛七頭と雄羊七匹をいけにえとしてささげた。ダビデは亜麻布の上着をまとっていた。箱を担ぐすべてのレビ人も、詠唱者も、運搬長ケナンヤも同様であった。ダビデは麻の工フォドも着けていた。イスラエルの人々はこぞって喜びの叫びをあげ、角笛とラッパを吹き、シンバルを鳴らし、琴と豎琴を奏でて、主の契約の箱を運び上げた。
(以上が神様のみことばです。主に感謝します。)

中心的主張点：

主の御名で呼ばれている私たちはそれに相応しく熱心に歩み、イエス様の弟子として愛の掟を守ろう。

序説：

「ワッショイ！ワッショイ！」これを聞くみなさんの笑顔をどう理解すればいいでしょうか。ある時、北沼津伝道所の会堂（2階の礼拝室の窓は隣地の周りを見下ろしてはいますが）そこで子供たちのCSのお話をしていると、その音が聞こえてきました。見てみると、言うまでもないですね。ハッピーを着ている人たちが「ワッショイ、ワッショイ」と大声を出して、神輿を担いで隣の道を行進していました。子供達は宣教師の話に聞くのを直ちにやめて、興奮して窓のそばに走って、その様子を眺めています。その日のCSはそこまででした。神輿の行進の方が彼らによほど面白かったからです。私の負けでした。神様がその中にいると思われていた神輿を担いで町のツアーに連れて行くというのですね。マジですか？！

そのような有様を初めて見たときも、今これを見る時も、悲しみと怒りを抱きます。まあ、かわいい習慣で日本的な一つの楽しみではないか、と言われるかもしれませんが、それには納得がいかない私です。ただ一つだけ役に立つことがあります。その様子は旧約聖書に出てくる契約の箱、「アーク」と言うものの運び方にとっても似ていますので、それが出てくる聖書の話のイメージをより具体的に想像することができます。

(お断り：「難しい」旧約聖書を頑張って読み、楽しく、熱心に学ぼうではありませんか！)

1、神の契約の箱「アーク」について知りましょう。

神の契約の箱「アーク」について確認しましょう。紀元前15世紀の話ですが、イスラエルの民がエジプトの地で奴隷とされ、苦しんでいたとき、神様は彼らを顧み、モーセを立て、彼らをそこから導き出しました。生ける神様ご自身は日中は雲の柱、夜間は火の柱の中で先頭に立って彼らとともにシナイ山の方に、そして約束の地に同行していただきました。神はモーセに命じた通り、いわゆる会見の幕屋を作らせ、その内外の細かい設計を命じました。

その会見の幕屋で神様がモーセと会い、生贄をささげてもらい、すべきことと進むべき道を教えてください、常にイスラエルの民とともにおられる事実を示してくださいました。

その幕屋全体は聖別されている清いもので、これの作りの細かいところまでだけではなく、その役割と扱い方、また運び方まで指導してくださいました。中で最も聖なるものとは契約の箱、アークです。そこで金で覆った棒を刺して、レビ部族のある氏族の祭司たちが担いで運ぶことを明瞭に求めておきます。一般のイスラエル人に見ることが許されません。アーク自体が運び出される時に特別な皮で包まれているからです。

泊まる時に天幕を再び組み立てて、アークをその中の奥の「至聖所」に置かれると、皮のカバーを外すわけですが、そこにごく限られた人たちが入ってはいけないのです。この掟を守らないなら、非常に厳しい罰則があり、死刑罪とされています。民数記の4章にある通りです。アークのフタは「贖いの座」と言い、罪のために捧げる生贄の動物の血をふりかけ、その上が神ご自身の王座となります。箱の中に神様がモーセに授けた十戒の2枚の板、マナの入った一つの壺、そして芽を出した大祭司アロンの杖です。

そのような形で神様は約束の地に導いてくださいました。そして、ヨルダン川に到着すると、ヨシヤ記の3章と4章に書いてある通り、アークを担いでいる祭司たちが先に川に入ると、水の流れが立止って、イスラエルの民は向こう岸に渡り、約束の地カナンに入っていきます。そして次第にこれを取得します。

2、サムエル記上4章にとんでもない事件が起こります。

そこから3百年近くが経ちますと、イスラエルの民は多少迷信的な思いを抱くようになっていきます。会見の幕屋とアークがまだありますが、その神聖さを重んじる思いが鈍くなります。むしろ、日本の神輿のように、我らは神を運び出す。これが我が手にあれば、神が我らと共におられ、味方になってくれるはずだと、自分勝手に神様を操ったり、利用することができるかのように考えるようになります。サムエル記上4章に書いてありますが、ペリステ人と戦争するとき、アークを戦場に運んでいきますが、そこで神様に見捨てられて、戦争に負け、アークがペリステ人の手に取られてしまいます。

話すと長くなりますが、これを持つことによってペリステ人に災いが降りかかり、このままでは破られダメになるからと言って、アークを台車に乗せ、牛をつなげて、牛が行くままにアークがイスラエル人のところに帰っていきます。そしてしばらくの間、到着した町、ベトシエメシュにとどまり、そこからまた次第にヘブロンまできました。この町はエルサレムの約40キロメートル南にある町で、ダビデ王がエルサレムを都にする以前 王位についていた町です。

ここからいよいよ今日の聖書箇所が出来事に来ました。(皆さん、お疲れ様です！)

ダビデ王は内外の敵を克服して、エルサレムで王宮を建設しています。神様を恐れ敬うダビデですので、神様のことを思い、アークをエルサレムに運んで、神様を礼拝して神様の導きを伺うためにその安置する幕屋を作る計画を立て、実施しようとしています。けれども、ここで大きな失敗をして、悲劇が起こってしまいます。それが歴代誌上13章に書いてある通りですが、今日の箇所、15章12-15節を確認しましょう。ダビデは言った。「『レビ族の家系の長であるあなたたちは、兄弟たちと共に自らを聖別し、イスラエルの神、主の箱を、わたしが整えた場所に運び上げよ。最初のときにはあなたたちがいなかったの、わたしたちの神、主はわたしたちを打ち砕かれた。わたしたちが法に従って主を求めなかったからである。』祭司とレビ人は、イスラエルの神、主の箱を運び上げるため自らを聖別した。主の言葉に従ってモーセが命じたように、レビ人たちが竿を肩に当てて神の箱を担いだ。」

ダビデ王は最初の計画が失敗に終わったことについて、先には怒ってしまいます。自分の盛大の祝いがダメになったために恥を着たからかもしれません。けれども、次第に、自分が高慢で聖なるものについて十分に気を払わなかったことに気づかされます。神の掟を今度はよく調べて、アークの意味とこれについての規定を確認していきます。王様だからと言って、このことを自分勝手にしないこと

を確認して、神様の名誉と栄光のために、やはり、最初の失敗が主の掟に従うべきことの教訓となってくれます。実は、申命記17章14節以降に王様についての律法もあります。18-20節を読みます。「彼が王位についたならば、レビ人である祭司のもとにある原本からこの律法の写しを作り、それを自分の傍らに置き、生きている限り読み返し、神なる主を畏れることを学び、この律法のすべての言葉とこれらの掟を忠実に守らねばならない。そうすれば王は同胞を見下して高ぶることなく、この戒めから右にも左にもそれることなく、王もその子らもイスラエルの中で王位を長く保つことができる。」

アークを2回目エルサレムに運ぶことの再挑戦の時に、成功します。ダビデの着た服装についても書いてありますね。歴代誌上15章27節にあります。王様らしい服装を取りやめて、謙った姿をしています。自分の偉さを言い張るのではなく、自分も同じイスラエル人、みんなの兄弟に過ぎないことをこのように示すのです。そして、その結果、喜びに満ちた盛大なお祝いとなっていきます。つまり、神様の掟にちゃんと従う結果はめでたしめでたしでした。

3、遠い昔の出来事の私達との関係を考えてみましょう。

では、このような大昔の出来事は今日の私たちとどんな関係があるのでしょうか。コリントへの手紙一10章11-12節に答えがあります。「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。」このアークの運び方の失敗、また成功は、私たちにとって尊い教訓となるわけです。私たちも災いを招くのではなく、幸いを招くことを教えるためです。

歴代誌上13章6節は契約の箱、アークについてこう記しています。「ダビデはすべてのイスラエル人と共にバアラト、つまりユダのキルヤト・エアリムに上って行った。それは、ケルビムの上に座しておられる主なる神の箱、その御名によって呼ばれる箱をそこから運び上げるためであった。」契約の箱は明らかに聖なるものであったのです。しかし、契約の箱も会見の幕屋も神殿など、そういった類の聖なるものは私たちにないのではないかとおっしゃるでしょう。

しかしながら、私たちにも「聖なるもの」があります。それは神輿ではもちろんないです。社や寺でもありません。お墓でもないのです。教会堂でもありません。これらでなければ何なのでしょう。それは神様のお名前前で呼ばれている私たち自身のことです。その心の内御霊が宿ってくださる主の民です。私とあなた方お一人お一人です。「わたしは聖であるから、あなたがたも聖でなければならぬ」と言われているわけです。パウロの書簡から言うと、あなた方は神の霊が宿っている生きた宮であり、キリストの体である。ペテロの書簡から言うと、「あなた方は、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。... あなた方も、生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。」クリスチャンは「キリストに属するもの」、キリストの名で呼ばれているものなのです。

これはどれほど重大なことなのでしょう。イエス様もおっしゃいました。あなた方の義はパリサイ派のユダヤ人や律法学者の義に勝るものでなければならぬ、と。それは、イエス様のおかげで働かずに信じる私たちのものとなったことを感謝します！しかしながら、なおさらに優れたものが求められます。それは何でしょうか。それは「わたしの命じておいたことをすべて守るように」なるキリストの弟子となることです。

4、救いの恵みは私たちに新たにします。

イエス様のおかげで罪が赦された私たちは新しい被造物です。古いものが過ぎ去って、すべてが新しくなりました。その大いなる恵みは安っぽいものではありません。私たちはイエス様が十字架で味わった苦しみと流された血によって買い取られたものです。エジプトの奴隷状態から導き出すのではなく、罪の奴隷から贖い出してくださったのです。これを理解するときの私たちはどうこの恵みに答えるのでしょうか。

私たちはすでに確認した通り、自分の実際に残っている罪を悔い改めて、主が求められるように、聖なるものらしく振舞って、主の掟を実施するものと成長していきます。主の民であるから、神の名誉を熱心に守ることは私たちの本能的思いです。ますます励むのです。これも神様の恵みによることでありながら、私たちの努力にもよることです。心の内に宿る聖霊がそのような思いを促してくださるのです。

確認しましょう。救いはただ恵みによると私たちは信じて、宣べ伝えています。しかし、私が今話したと矛盾しないでしょうか。決してそうではありません。私たちの立場はイエス様の横に十字架刑で苦しんでいた強盗と同じです。イエス様に頼った彼は何かの努力や技を提供して救われたわけではありません。信じてその瞬間、罪が赦されてパラダイスに受け入れていただく有資格者となりました。けれども、この世にまだいる私たちは救われているものとして、主の後を辿りゆく過程がなおあるのです。それはキリストの弟子らしく励むことです。イエス様の救われた民らしく歩むことです。私たちの心の耳に、「これが道だ。これに歩め。」と導く聖霊の御声が語ります。昔の民にも示されたように、掟を学び、右にも左にもそれないようにします。イエス様がおっしゃったように、命に通じる狭い道を歩むように気を使って前進します。

私が中高生の時に教理問答書の勉強会に通っていました。ハイデルベルク信仰問答書のことを学んでいたのですが、そのテキストの名称は今もよく覚えています。それは、「Saved to Serve」(仕えるために救われた、あるいは、救われた者は仕える)というものでした。問答書の構造を要約する表題です。第2問にあるように、幸せに生きまた死ぬために知らなければならないことが3つある。それは自分の罪深さを知ること、どのように罪から救われるかを知ること、そして、救われたものとしてどのように感謝を表すことかを知ることの3つです。このような常識を持ちましょう。単なる信者ではなく、やはり、救われて、イエス様の弟子となりましょう。

「私が命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と、イエス様が弟子たちを世界宣教に任命します。私たちにも与えられている任命です。そして主はどのように命じてくださったでしょうか。旧約聖書の中にある最も大切な戒めは何ですかを聞かれた時の答えを覚えていらっしゃるでしょうか。それは神様を すべてをあげて愛することと、隣人を自分のように愛すること。掟を守ることが儀式的、外面的なものだと誤っていたパリサイ派の人たちに、「私が求めるのは憐れみであって生贄ではない」と諭してくださいました。ですから私たちは理解しています。ミカ書6章8節にある通りです。「人よ、何が善であるのか。 / そして、主は何をあなたに求めておられるか。 / それは公正を行い、慈しみを愛し / へりくだって、あなたの神と共に歩むことである。」言い換えれば、愛と憐れみと親切を熱心に示すことではないでしょうか。自分の功績を作り上げて誇ることで、自分の欲望を満たすことでもありません。人が私たちを見て神様の名前を汚すことでももちろんありません。私たちの振る舞いを見て、主を賛美するように、良き技に励むことです。

決 論： この道は厳しいものでしょうか。ある意味ではそうです。しかし、ダビデたちが学んで来た体験したように、ちゃんとしているならば、聖なるものをふさわしく扱うと、私たちの人生は喜びに満ちた礼拝となり、盛大な愛餐会となります。私たちの想像を絶するほどです。

キリストのおかげで私たちは聖なるものです。神様の名前を運ぶ器です。ですから、聖なるものらしく、自分自身に気をつけて節制し、主がお喜びくださるよう振る舞うのではないのでしょうか。そうすれば、共におられる主の素晴らしさをこの世の人々に示すことになるでしょう。きっと！